

# 平成30年度 商工農林水産委員会視察報告書

商工農林水産委員会  
委員長 成田 光雄

1 視察期間 平成30年7月11日(水)

2 視察先及び視察事項

- (1) とやま市漁業協同組合四方本所  
「沿岸漁業（ヒラメ中間育成事業）について」
- (2) 常西用水土地改良区小水力発電施設  
「小水力発電について」
- (3) 常東用水土地改良区小水力発電施設  
「小水力発電について」
- (4) 神通川アユ・マス増殖場  
「内水面（アユ等の繁殖事業）について」

3 視察参加委員

委員長	成田	光雄
副委員長	高田	真里
委員	泉	英之
〃	金井	毅俊
〃	大島	満
〃	橋本	雅雄
〃	松井	桂将
〃	柞山	数男

4 随行職員

議事調査課議事係長	中山	崇
議事調査課主査	金井	沙織

## 5 視察概要

### (1) 視察事項

沿岸漁業（ヒラメ中間育成事業）、内水面漁業（アユ等の繁殖事業）及び小水力発電の取組みについて

### (2) 視察の目的

本市の沿岸漁業で行われている栽培漁業や内水面漁業で行われている養殖事業、また、土地改良区が主体となって整備を行う農業用水を利用した小水力発電施設について、それぞれの取組み状況を視察するとともに、当該事業への理解を深め、今後の委員会活動の参考とするもの。

### (3) 取組みの概要

#### 沿岸漁業（ヒラメ中間育成事業）について

富山市では、沿岸資源の維持・回復による水産物の安定供給を目的に、栽培漁業振興対策として、実施団体である富山市漁業振興協議会に補助を行っている。

栽培育成した稚魚は、中間育成として一定期間を放流先に近い環境下で育成することにより、放流後の生存率をより高めることができる。また、中間育成で生存能力の高い種苗を生産することや、資源管理活動を行うことは、つくり育てる漁業の普及や漁業者の意識向上にもつながっている。

今年度、ヒラメの中間育成は、県内では唯一、四方漁港で行われている。

#### 内水面漁業（アユ等の繁殖事業）について

富山漁業協同組合では、吉倉の神通川アユ・マス増殖場、八尾町薄島の神通川アユ増殖場、塩のサケ増殖場と3つの増殖場施設を持っている。

増殖施設では、アユを350万尾、サクラマスを30万から50万尾、サケを約300万尾生産、放流している。また、神通川アユ・マス増殖場内にある全長250メートルの人工河川産卵場では、抱卵親魚を放流し、自然抱卵させている。孵化した稚魚（約3億尾）は、神通川から海に出て、翌春に川に遡上する。

富山漁業協同組合の増殖施設による神通川へのアユの放流量は2万キログラムあり、全国的にもこれだけの量を1つの河川に放流しているところは少ない。

なお、神通川には多くの遊漁者が訪れており、アユのシーズンにおける友釣りの1年券の購入者の8割が、また、1日券の購入者の99%が県外の遊漁者である。

#### 小水力発電について

常西用水土地改良区では、常願寺川左岸側の常西幹線用水路の常願寺川第四発電所分水地点を起点に、そこから取り入れた水を下流側に導くための「水圧管路」の施行と「水力発電所」を建設している。（平成32年6月運転開始予定）

常東用水土地改良区では、常願寺川右岸側の仁右エ門用水との分水地点から取水し、

「常東合口幹線発電所」を建設した。(平成29年8月1日完成、発電開始)

両施設とも、その特徴として既存の水利施設の有効落差を利用することにより、建設コストの削減を図るとともに新たな環境負荷を抑えていること、また、売電収入は土地改良施設の維持管理費に充て、農家負担の軽減を図ること、さらには、水の落差エネルギーを利用するため、CO<sub>2</sub>排出量が少なく、地球温暖化対策に貢献することが挙げられている。

#### (4) 所感

〔成田委員長〕

ヒラメ中間育成を視察。クロダイやクルマエビと違い、病気にかかりやすいデリケートな品種であることから、育成環境についての調査研究が必要である。また、地元の園児による稚魚放流は次世代の漁業存続のためにも継続に期待する。

小水力発電施設は運転開始前後の2か所を視察。同じ水系だが分水地点や事業費の負担率、維持管理費などが比較でき、事業運営・管理面での相違、特徴が参考になった。

神通川でのアユ・マス増殖場を視察。伝統ある神通川を漁業者が守ってきた取組みなど、一連が観光資源にもなっていることから支援策について調査研究が必要である。

〔高田副委員長〕

ヒラメの中間育成は生存率アップの施策。その回帰率は2万匹に対し8%で、十分に成果があるとのこと。クロダイ、クルマエビも予定。またワタリガニやアカムツも検討している。多種の中間育成の実施で、漁業の活性化を期待する。

常西・常東用水環境整備事業は、電力量の供給のほかCO<sub>2</sub>削減効果も大きく、売電、農家負担軽減、環境面と様々な面でプラスになっている。

アユ増殖場では4か月間海水でアユを育て、その後水槽で育成。放流用と出荷用、自然産卵用に分類。アユ釣りのためだけに神通川へ訪れる県外釣り人も多く、もっとアピールすべきと思った。

〔泉委員〕

四方漁港ではヒラメ約2万匹の放流で、8%程度が生魚として漁獲高に反映され、神通川増殖場では、アユも遡河回遊魚であることから、富山湾の海水を施設に運搬し、産卵から飼育・放流まで一貫して増殖している事実を知り、自然の仕組みを利用した管理漁業の大切さに感銘を受けた。

一方、小水力発電においては、完成後の出資金の回収が、常西用水では8年、常東用水では15年を見込んでおり、補助金額の影響を受け、償還年には差はあるものの、土地改良区組織が自主財源を確保する事が、今後の運営上転機となる重要な決断だったと考える。

〔金井委員〕

本日実施された視察すべてが、水とかかわる施策で今後とも長く富山に根づく問題で

重要なものと位置づくでしょう。常西及び常東用土地改良区小水力発電施設は、今後の運用として、電力会社の変電所への売電から、地元住民への売電とし、災害時においても発電しうる強固な施設へと移行するのかなあと感じました。

水産物資源の魚の養殖事業については、生存率が思いのほか少なく驚きました。釣り愛好家の私にとっては、川も海も家族連れでにぎわってほしいと考えているので、この事業の継続と発展を祈っています。

〔大島委員〕

四方漁港内でのヒラメ中間育成及び富山漁業協同組合アユ・マス増殖場について、どちらも海洋深層水を利用しており、その有益性は理解できたが、規模や費用対効果を考えると、今後将来性が見込めるか心配である。

また、富山漁協の事業収支について、電力会社より多額の助成金でバランスが取れており、今後も同様に続くか懸念がある。

小水力発電は、環境に配慮した事業として発展していったほしいが、中山間地域にも、より小規模な小水力発電が多数設置されるよう水利権等の課題を解決すべきと思う。

〔橋本委員〕

小水力発電施設を視察して、あらためて農業について考えてみた。

我が家が今の地域に移り住んだ頃、あたり一面に田園風景が広がっていたことを憶えている。それが約50年経った今、私の町内では、田んぼ一枚すらない。それでも家の横には農業用水が流れている。この用水が老朽化し修理が必要になった時はどうなるのだろう。農業従事者が減少するなかで、個々の負担は大きくなるばかりではないか。小水力発電によって売電収益を得ることは農業を守ることであり、同時に環境問題解決の一助にもなるであろう。行政としても何ができるか考えたい。

〔松井桂将委員〕

富山市漁港四方本所で実施されている「ヒラメの中間育成」について、四方漁港内で約2万匹の稚魚を育成し富山湾内に放流する固体の「回帰率」は8%であり、他に黒鯛や車海老の中間育成にも取り組んでいる。富山漁業協同組合の「神通川アユ・マス増殖場」ではアユの種苗は350万尾を生産目標として取組まれ、県内はもとより県外からの釣り客からの遊漁料収益や助成金により運営されている。アユの漁業は歴史と文化により後世に残すべきものである。いずれも水産資源の確保と水産業の活性化に非常に重要と考える。観光資源としても注目すべきものである。

〔柞山委員〕

今回の視察では、小水力発電事業と富山湾でのヒラメの中間育成放流、神通川アユ、マス増殖事業を視察し、特に神通川でのアユ、マス、サケの増殖放流している富山漁業協同組合の歴史や神通川の漁業について認識を新たにした。

大伴家持による「売比川の早き瀬毎にかがりさし八十伴の男は鶉川立ちけり」が有名

で、神通川がわが国鵜飼の最古のものの一つであり、鵜坂地区では毎年、鵜飼まつりが開催されている。藩祖前田利次は、アユ、サケ、マスを幕府への献納品と定め2代目は、禁魚期間をつくり、3代目は鮎の酢漬を将軍吉宗に献上し漁業が飛躍的に発展している。明治45年には笹津、岩木、有沢区域をサケ、マス、アユの御猟場として指定、これは全国で長良川と2河川のみであった。内水面漁業として飛躍的に発展を遂げているが、一方で、観光資源としても注目すべきである。

とやま市漁業協同組合四方本所





常西用水土地改良区小水力発電施設





# 常東用水土地改良区小水力発電施設





神通川アユ・マス増殖場

